毎日歌壇

加藤 治郎 選

多目的ルームと呼んでいるらしいわたしの中にわたしが潜む　東京　富見井高志

△評▽もう一人の私がいる。様々な目的で自由に使える部屋を作ったのだ。自分がコントロールできない領域を知ったのである。

両の手にシャワーの雨を受け止める遊びの途中内線が鳴る　京都市　小川　ゆか

△評▽シャワーを浴びる解放感がある。内線は職場のものだ。幻のベルかもしれない。

きみだけをおもうわたしときみだけがいる国の霧のような物語　花巻市　永汐　れい

初めての嘘をつくときくちびるはレーズンバターサンドの香り　堺市　初夏みどり

白雲を翼と呼んでいつまでもそこにあるから飛べない僕ら　平塚市　芝澤　樹

あかるい部屋のあかるい天井からふいに雨が降りだすから眠れない　三鷹市　菅原　海春

泣いている人と笑っている人を同時に照らす春の満月　東京　嶋村　純

ひとひらの落花はアナログ「花筏」とすればデジタルかもしれぬ　日進市　甘夏せと香

缶スープ飲みきれなかった一粒のコーンに全てを打ち明け、捨てる　横浜市　砂月　七

またひとつひとつひとつにさよならをつげる暮らしにさよならをする　宮古島市　塩見　佯

水原 紫苑 選

夜もまた生きているのだ点滅を繰り返しゆく信号があり　京都市　よだか

△評▽生きものとしての夜。点滅する信号はそのしなやかな肉体の一部なのだ。新しい生命の感覚である。

境界線超えねばならぬと神は言う赤信号の目の前にいて　横浜市　砂月　七

△評▽境界を超えたら、あるいは神はその姿を現すのだろうか。

はるかぜで育つ花々を愛でるから中指までも花束になる　横浜市　大原　香花

『饗宴』を書架にもどせばもう二度と愛し合えないような夕暮れ　取手市　奥山いずみ

ゆっくりと時間を運び青鷺は雨の小川をいま飛び立った　さいたま市　雨谷　詩穂

みごもりし鹿たたずめり人よりも花よりも遠き幻を視て　神戸市　空岡　邦昂

雨音の濃淡　胸に咲く種を手わたすような問いかけがある　札幌市　鈴木　精良

銅鐸の音のあまりの大きさに鳴らした異国の人とはにかむ　柏市　遠野　鈴

ゆふぐれにはぐれてしまったわたくしを探しにゆけば揺れるふらここ　見附市　有村　桔梗

文学は街へ出たくて疼いてる書棚の隅で土蜘蛛がからむ　札幌市　橘　晃弘

伊藤 一彦 選

スクランブル交差に春の嵐吹く誰もに会えないひとがいること　武蔵野市　北谷　雪

△評▽会いたいけど会えない人がいるのだ。それを「誰も」と言い、上の句で場面を巧みに描き、切ない恋の心を確かに表現。

町民に愛されているケーキ屋の向かいにケーキ売るチェーン店　春日部市　宮代　康志

△評▽チェーン店の販売戦略に感心し、そして怒っているのだろう。厚かましいと。

待つことの先に待ってるのが何かそれが大事と思う待つこと　堺市　一條　智美

麦畑の麦ゆらす風わたしたち女神であれば神にはなれない　横浜市　森山　緋紗

早春のひかりと雨を拒絶してやさしい百葉箱になりたい　垂水市　岩元　秀人

持ち主は来なかったらしい道端で拾った三万円を受け取る　柏市　遠野　鈴

夜勤明けのちょっぴり赤い目に眩し敦賀へ向かふ一番列車　横浜市　千々岩　清

iPhoneが見知らぬ街を映し出すどこでもドアはもうそこにある　横浜市　砂月　七

若き日にマジで目指した志望校受かりたかった行かんでよかった　新発田市　飯田　英範

兄ちゃんはママにねだったもう一人ママがほしいとママのお膝で　東京　青木　公正

米川千嘉子 選

エレベーターの床に花びら落ちていて、なんども忘れなおすんだろう　東京　田中　耀

△評▽屋内に紛れこんだ桜が思い出させる外の桜。あるいは桜にまつわる記憶。忘れたいことを忘れきるのはむずかしい。

国産でなくてはダメと言ふ友よ自給自足が出来ない国で　尼崎市　小石　絹子

△評▽食料自給率が著しく低い日本では不可能。矛盾を突いて皮肉味ある批評だ。

アルバムに貼れぬ思い出　予告なく少年の声が変わり始める　フランス　小仲　翠太

小さめの桃の蕾のうれしさは遠足のリュックの中のミルキー　北九州市　松尾あけみ

食品の値上げの春にごみの量減りしか鴉が怒ってあさる　静岡市　柴田　和彦

非正規が互いの仕事を気にし合う「同一労働同一賃金」　国立市　佐藤　建

「ぼくちゃんが産まれましたで」姉やの声が長いわたしの記憶の初め　尼崎市　髙橋三千子

雨音についほっとする20キロ苦土石灰は明日運ぼう　名古屋市　甲斐万里子

この春は水面を覆う桜なくただ流れゆく馬洗川　横浜市　予報はずれの雨

理科室の人体模型の眼差しの先の世界は半分に割れ　三重　中山由賀子

投稿規定　はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます

おことわり　次回は16日に掲載します。